

2026年度(総合型選抜)AO選抜入学試験

国際関係学部「国際関係学専攻講義選抜方式」

1. 実施状況

(1) 志願者数、合格者数等

学科・学域・専攻等	志願者数	一次合格者数	最終合格者数
国際関係学専攻	127	54	32

(2) 本入学試験の目的

「国際関係学専攻講義選抜方式」は、国際関係学部 国際関係学科 国際関係学専攻の入学を志望し、国際社会の諸問題に対して高い関心と探求心を持ち、自発的に学習に取り組むことができる方を受け入れるための入試方式です。

単なる学問的な理解力や分析力だけではなく、国際社会の諸問題を自分事として捉え自らの考えや意見をしっかりと持ち、将来的に、行政・経済・文化・平和といった観点から社会に貢献できる可能性を秘めた方の選抜を目的としています。

2. 試験内容

(1) 第1次選考

第1次選考は、エントリーシートの作成を出題しました。エントリーシートの内容は以下の通りです。

「立命館大学の国際関係学部で学びたい分野やテーマと、なぜそれらを学びたいのかを、あなたの経験と関連させながら記述してください。」(1,000字以内)

また、英語外部資格試験証明書の提出も求め、基礎的な英語運用能力の確認を行いました。

(2) 第2次選考

第2次選考では、20分間の「講義」、50分間の「小論文」試験を実施しました。講義については、「小論文」試験のテーマ・情報提供として位置づけ、「小論文」の試験を通じて行いました。

講義テーマは「日本における少子化問題」としました。そのうえで、小論文の問題を「講義で取り上げられた日本の少子化対策について、その有効性と課題を整理した上で、自分が考える理想的な少子化対策のあり方について論述してください。」とし、受験者に作文を指示しました。

3. 出題の意図

(1) 第1次選考

第1次選考では、自分自身の経験を基に志望動機や学習計画について確認するための設問を設定しました。次項「評価のポイント」で詳細を述べますが、受験者自身の経験や体験、その他の具体例を交えて記載してもらうことで、受験者の意欲や態度、知識について確認することを意図して出題しました。また、あわせて受験者の文章作成能力を測ることも目的としていました。

(2) 第2次選考

小論文では、当日の講義テーマに関する理解度、講義内容を要約する力、そして自らの深い考えに基づいた説明を論理的に展開できているかどうか評価することを重視しました。そこで「自分が考える理想的な少子化対策の在り方について論述する」ことを求めました。また、日本の少子化対策の有効性と課題の整理を求めることで、受験者の問題発見力および批判的思考力の有無や程度を図ろうとしました。さらに、本小論文は、より自由度の高い問いにすることで、問題意識の深さ、

講義を通して提供される情報も踏まえて自己の意見を論理的にまとめる力、そして文章の構成力を見ることを目的としました。

4. 評価のポイント

(1) 第1次選考

エントリーシート全体を通して、受験生が国際関係学部で何を学び、どのような活動に取り組みたいと考えているのか、学部での学びを生かして将来どのような取り組み（就職や大学院進学など）を展開したいのかという点に着目しました。

入学後に学びたい分野やテーマについては入学以前の段階であることを考慮し、ある程度漠然としたイメージであることは許容したうえで、受験生自身の経験や体験とつながりを持って記述できているか、単なる印象論に留まることなく国際社会の諸問題への関心や知識などについて、可能な限り具体的に記述することができているかを評価しました。また、国際社会の課題に高い関心を持ち国際関係学部での学びに対して高い意欲を有しているかを評価しました。

加えて、文章表現の正確さ、説得力、論理構成なども評価対象としました。

(2) 第2次選考

小論文では、受験者の講義内容及びそれに関連するテーマについての理解度、論理的思考力および表現力（質問に対する回答的的確性・内容の一貫性・簡潔・明瞭性等）を中心に評価しました。50分という時間の中で、講義を通じて整理した自身の考えを、求められる文章量の中で論理的かつ分かりやすく表現できているかという点を評価しました。

5. 解答状況

(1) 第1次選考

立命館大学国際関係学部の「国際関係学専攻講義選抜方式」入学試験は、本学国際関係学部を志望し、自分なりの視点から国際関係を考察し、創造することのできる能力に優れた人を受け入れるための入試方式です。つまり、学校で勉強して身に付ける理解力や分析力だけではなく、自らの考えや意見をしっかりと持ち、それにもとづいて平和で豊かな新しい国際関係を創造していくことができる人を選抜する試験です。したがって、解答は受験生自身の経験や体験にもとづいた内容であることが強く求められました。国際社会についての関心の度合いや学習意欲が評価の中心となり、「入学後に学びたい分野やテーマ」に関しては、まだ入学以前の段階ですので、それほど細かく絞り込む必要はありませんが、受験生自身の経験や体験が、単なる印象にとどまることなく、国際政治や国際経済などの具体的な分野やテーマに結びついているかについて着目しました。また、文章表現の正確さや説得力、論理構成なども評価の対象としました。

(2) 第2次選考

講義内容を踏まえて、日本社会における少子化および関連する問題について適切に理解し、自身の考えを整理したうえで論理的にまとめることを求めました。理想的な少子化対策について、政治・経済・文化・ジェンダーといった多角的な視座から、各自が関心を抱くテーマに焦点を当て、独自の考察へと結び付けていく解答が多く見られました。中には、講義内容を整理した上でそれを批判的に捉える回答や、留学先での観察や経験に基づいて答えようとする姿勢が確認されました。また、日頃からメディアを通じて独自に収集している情報を組み合わせ、政策事例を交えながら考えを示している解答もありました。日本社会が抱える現状と課題を論理的に分析し、具体的な主張を示しつつ、批判的な思考と日常的な問題意識の深さを表す小論文が高い評価につながりました。

6. 次年度の受験生へのアドバイス

第1次選考では、日々の経験や体験の中に国際関係にかかわる事象を見つけ、それを深く考え抜く能力が問われます。もちろん、その経験や体験というのは、長期留学や異文化体験だけを指しているわけではありません。ふとした日常体験の中にも、複雑な国際関係が色濃く影を落としているものです。まずそれに気づく力、自分の身近な問題と関連づけ持続的に考え続ける力、そして社会問題全般に対する問題意識を日々磨いていってください。また、学部ホームページなどで国際関係学部について調べた上で、自分の希望との適合性をある程度言及できるとなお良いでしょう。第2次選考で課される小論文を作成するには、議論の要約力や論理的な文章作成能力も問われます。また、新聞やメディアを欠かさずチェックし、関連する書籍やドキュメンタリーなどに数多く触れることで、国内外の問題や、それらが日本の政治・経済・社会および自分の身近なところにとどのような影響を与えているのかなど、日頃から深く考える習慣を身につけましょう。また、物事を多角的にとらえ、自分の考えを論理的に表現する文章を作成する練習も、段落分けや誤字に留意しながら行っておくと良いでしょう。

以上